

戦前、大阪城本丸東隣に本部のあった大阪砲兵工廠（大正一二年に陸軍造兵廠大阪工廠、昭和一五年に大阪陸軍造兵廠と改称）は、アジア屈指の兵器工場でしたが、その支廠である播磨製造所は高砂の海浜部に建設されました。現在、三菱重工業高砂製作所があるあたりを中心に約五〇万坪の敷地が確保されます。

昭和二〇年九月末の『大阪陸軍造兵廠ノ現況』によれば、京都く島根の各地に展開する同廠直営事業所中、播磨製造所の一六〇万㎡という敷地面積は抜群で、大阪本廠の一七万㎡をも凌駕します。

敗戦時、播磨製造所では四工場が稼動し、火砲・高射砲の砲身素材などが生産されていましたが、空襲を受けなかったため機械設備も無傷で残りました。戦後、この設備の一部を借受けて操業したのが国鉄高砂工場（大鉄局高砂工場部）ですが、昭和二七年、旧造兵廠敷地の三分の一におよぶ空地払下げ先が神戸製鋼

に決るにあたり、往時の悲話  
が伝えられました。

「昭和十三年十一月、旧陸軍によって同「荒井」村の田三十三万二千坪、畑一万一千坪、宅地千二百坪、その他一万三千三百坪を戦争目的のため無理やりに買上げられた。この土地は全村農地の六〇%を占め、三百余の農家の半数が失業し、また造兵廠操業後の移住者激増でも「村は大きな負担に苦しめられた。」（『神戸新聞』昭和二七年一月五日）  
そして、造兵廠の進出を機に、高砂は都市計画法の適用を受けることとなります。

（高砂市史編さん専門委員

大森 実）



▲造兵廠の印（砲身）がデザインされたマンホール蓋（山電荒井南に現存）